

# KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

## 雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか (2)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2024-04-10 キーワード (Ja): 日本語教育, 会話コーパス, 談話, 教材開発, 終助詞 キーワード (En): 作成者: 西郷, 英樹, 清水, 崇文 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 上智大学
URL	<a href="https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000196">https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000196</a>

## 雑談で話し手はどのように 聞き手との間に共通基盤を構築しているか (2)

西郷 英樹

清水 崇文

### 要旨

現在、筆者二人は、日本語教育への応用を目標に、聞き手との間に共通基盤を構築する際、日本語母語話者がどのような言語形式・ストラテジーを用いているかを、自然発話会話コーパスの分析を基に考察を行っている。西郷・清水（2022）では、聞き手のみが知っている内容を共通基盤化する際に現れる「ンダケド」系と「ノ」系に関する考察結果の報告を行ったが、引き続いて、「ケド」系、「ンダッテ」系、「ワケ」系、「カナ」系、そして、結論を先に提示するストラテジーの分析及び考察を行った。その結果、「ンダケド」系及び「ノ」系同様、それぞれが共通基盤構築のプロセスの中で特徴的な役割を果たしていることが明らかになり、日本語教育に有益な知見を得ることができた。

【キーワード】日本語教育、会話コーパス、談話、教材開発、終助詞

### 1. はじめに

筆者二人は、日本語教育に応用すべく、達成すべき明確な目的がない会話（目標志向性が希薄な会話）である「雑談」の中で、日本語母語話者がどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか、を調査するために、「BTSJ 日本語自然会話コーパス（トランスクリプト・音声）2020 年度版」に収録されている 21 の会話データ（総分数 485 分 34 秒）を分析し、話し手の共通基盤構築の意図が認められる箇所を 543 例抽出した。本研究での「共通基盤構築」とは、話し手が次に話したい内容の前提を聞き手との間に形成することを指す。西郷・清水（2022）では、その分析結果のうち、共通基盤の内容を「話し手のみが知っている場合」で出現率が非常

に高かった言語形式に関して報告した。本稿では、西郷・清水（2022）で未報告の [話し手のみが知っている場合] の分析結果を報告する。なお、本研究の実施に至った背景、また会話データの詳細及び分析方法については、西郷・清水を参照されたい。

## 2. 共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合

話し手の共通基盤構築の意図が認められる 543 例のうち、72.4%にあたる 393 例が [共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合] であった。この 393 例のうち、「ンダケド」系と「ノ」系がそれぞれ 45.8%（180 例）と 44.0%（173 例）と非常に高い出現率で見られたことは西郷・清水で報告したとおりである（表 1）。

表 1 共通基盤の内容を話し手のみが知っている場合の言語形式・ストラテジー

系統	例数	言語形式・ ストラテジー全体に 占める各系統の 割合 (%)	男女別 各系統 の例数		系統別例数の 男女比 (%)		男女別各系 統の内訳 (%)	
			男	女	男	女	男	女
ンダケド	180	45.8	62	118	34.4	65.6	49.2	44.2
ノ	173	44.0	46	127	26.6	73.4	36.5	47.6
ケド	16	4.1	13	3	81.3	18.8	10.3	1.1
ンダッテ	13	3.3	2	11	15.4	84.6	1.6	4.1
ワケ	6	1.5	2	4	33.3	66.7	1.6	1.5
ヨ	3	0.8	0	3	0.0	100.0	0.0	1.1
カナ	1	0.3	1	0	100.0	0.0	0.8	0.0
結論先出し ストラテジー	1	0.3	0	1	0.0	100.0	0.0	0.4
計	393	100	126	267	32.1	67.9	100	100

これら 2 系統以外の言語形式・ストラテジーの例数は、3 番目に例数が多かった「ケド」系であっても全体の 4.1%に過ぎず、上位 2 系統の例数と極端な開きが見られた。この結果は、上位 2 系統以外の系統は、様々な文脈で使用できる汎用性がそれほど高くないことを示しており、日本語教育で扱う優先順位も低いということになる。しかしながら、もしこれらの系統が共通基盤構築のプロセスにおいて上位 2 系統とは異なる働きを持つのであれば、日本語教育への応用に値するか精査する必要があると思われる。そのため、上位 2 系統以外の言語形式・ストラテジーの

分析・考察を行った。以下はその結果の報告である。

## 2.1 「ケド」系

前述のように、「ンダケド」系及び「ノ」系に次いで、3番目に多かったのが、「ケド」系（全16例）で全体の4.1%であった。その内訳は、「けど」が11例、「けどー」が3例、「けども」「けどさ」が各1例であった。

なお、本研究で扱う「ケド」系は、その前後の意味的な関係が逆接ではないものに限定した。その理由として、日本語教育への応用を目標とする本研究では、日本語教育の教材で未だほとんど扱われていない共通基盤構築の言語形式・ストラテジーを抽出することが第一目的であり、すでに初級レベルのうちから学習者の発話の中に高い頻度で観察される順接を表す連用形（テ形）や逆接を表す「けど」を考察の対象外としたためである。

「ケド」系の例数の割合を男女別で見ると、男性が81.3%（13例）、女性が18.8%（3例）で大きな開きがあった。男性の13例は、7つの異なる会話データにまたがって現れており、特定の話者にその使用が集中していなかった。この結果からは、「ケド」系は男性に使用される傾向が高いと言えそうであるが、例数が16例と少ないため一般化することはできないであろう。

以下のBTSJ-20<sup>(4)</sup>には「けどー」が2つ現れている。

92	91	*	JM008	速いやつ?。	😊👉
93	92	*	JM007	なんか、すごいねー、超速くてー(ああ)、急降下するやつでー、今あるかわかんないけどー、当時あってー(うん)、おれ1回乗ったけどー、なんかもう“ひー、もういいです”[高い裏声で]って感じなんだよね。	😊👉

BTSJ-20 「ケド」系の例（会話番号 004）

この会話データの前から、話し手（JM007）と聞き手（JM008）が次に遊びに行くところについて思案している。聞き手が一案としてアトラクション施設を挙げ、それに応答する形で話し手がよみうりランド遊園地を候補に挙げている。その後、話し手がそこにあるバンデッドというアトラクションに言及したところ、92行目でそれについて知らなかった聞き手が「速いやつ?」と尋ねている。この質問の返答として、93行目で話し手はまずバンデッドがどんな乗り物なのかを説明し（「超早くてー(ああ)急降下するやつでー」）、その後、自分の体験談に移行し、その中で「け

どー」を2回用いている。1つ目では、現在もそのアトラクションがあるのか把握していないことを前置きとして述べ（「今あるかわかんない<sup>けどー</sup>、当時あってー（うん）」）、2つ目では、実際に乗った時の感想を述べる前に、「すでに一度乗ったことがある」という内容を提示している（「おれ1回乗った<sup>けどー</sup>、なんかもう“ひー、もういいです”って感じなんだよね。」）。

### 「けど」を「んだけど」「のね」に言い換えられるか

この2つの「けどー」の用法は、共通基盤構築の際、その前に現れる内容をハイライト化しない点で、西郷・清水（2022）が指摘した「ンダケド」系と「ノネ」グループの機能と非常に近いように思われる。そこで、2つの「けどー」をそれぞれ「んだけど」と「のね」で言い換えてみると、「んだけど」に言い換えた場合は2つとも日本語としての不自然さをほとんど感じないのに対して、「のね」に言い換えた場合はかなり自然さが損なわれるように思われる。1つ目の「けどー」を例にとると、「今あるかわかんない<sup>けどー</sup>、当時あってー（うん）」を「今あるかわかんない<sup>んだけどー</sup>、当時あってー（うん）」に変えてもほとんど違和感はないであろう。一方、「今あるかわかんない<sup>のねー</sup>、当時あってー（うん）」は、この会話の流れを考慮に入れるとかなり不自然に感じられる。2つ目の「けどー」についても同様のことが言える。

この違いはどこから来るのだろうか。言語形式の観点から見ると、「ンダケド」系には「ケド」系の接続助詞「けど」が含まれているが、「ノネ」グループには含まれていない。「けど」には話している最中に内容の調整を行ったことを表す機能があることが指摘されている（李・吉田 2002）が、この調整の機能の有無が、「んだけど」には「けど」との互換性があるが、「のね」には「けど」との互換性がない理由ではないだろうか。

BTSJ-20では、聞き手（JM008）が述べたことへの応答として、話し手（JM007）はよみうりランド遊園地に言及し、アトラクションであるバンデッドの説明を始めている。つまり、話し手が率先してそれらについて話し始めたのではなく、相手の言ったことに対する適切な返答を瞬時に考えた結果だということである。このような場合、何をどう話すか、きれいに整えられる状況下にないため、返答の中で情報の追加、挿入、補足などの調整が頻繁に行われることもあると考えてもよいだろう。

「ンダケド」系にはこの調整の一種である「注釈」の機能があることが指摘されている（西郷・清水 2022；李・吉田 2002）。そのため、調整の働きをする「けど」は、同様の機能を持つ「ンダケド」系とならば言い換えることができるのではないだろうか。

注釈としての「ンダケド」系については西郷・清水で詳述したが、その際に提示した会話例（BTSJ-19）を以下に BTSJ-21 として再掲したい。

665	604-2	/	JF092	く地元でね>[>]、友達が、今、ろうぎん、ええと、銀行??、みたいなとこ行ってんだけどー、
666	606	*	JF093	うん。
667	604-3	*	JF092	やっぱさ、地元でさ、昔習ってた小学校のときとかの先生とか、来る<わけよ>[<]。
668	607	*	JF093	くうんうん>[>]、あー。
669	608	*	JF092	“あの先生いたよー”とかって。 😊👉
670	609-1	/	JF092	で、なんか、「人名2名」っていうんだけど、その子、「人名2名」は、めちゃめちゃ、小学校の時、いじめられてた、教頭先生が、今校長先生になってんだけど、 😊👉
671	610	*	JF093	げ。
672	609-2	*	JF092	「人名3姓」教頭つつーんだけど(うん)、すーんごい「人名2名」、いじめんの。
673	611	*	JF092	なんか[【。 😊👉
674	612	*	JF093	]]真剣に?。

BTSJ-21 注釈としての「んだけど」の例(会話番号 207)

BTSJ-21 には、注釈の機能を持つ「んだけど」が3回現れている。670行目に現れている1つ目の「んだけど」は665行目に登場したJF092の友達の名前を、2つ目の「んだけど」はその友達をいじめていた教頭が現在校長になっていることをそれぞれ注釈している。そして672行目に現れている3つ目の「んだけど」ではその教頭の名前を注釈している。このような注釈の挿入は、話し手が話している最中に、聞き手が話の流れを追いやすいように情報を補足したほうがよいと瞬時に考えた結果であり、話し手が発話内容の調整を行ったとみなせるわけである。

### 共通基盤構築からみる「けど」と「んだけど」の違い

ここで一つの疑問が湧いてくる。それは「ンダケド」系と「ケド」系の違いについてである。我々日本語母語話者は、意識的ではないにせよ、どのようにこれらを使い分けているのであろうか。両者の違いは、「のだ」（「んだ」は「のだ」の口語体）を含むかどうかだけであることから、「のだ」を使う必要性の有無で使い分けがなされていると考えるのが論理的であろう。「のだ」は直前の内容を名詞化・客体化する「の」に断定の「だ」がついた形であるが、安田（2012: 198）は「のだ」の本質的な機能について、「会話においては話し手と聞き手との『認識の共有』を

目指す発話となる」と述べている<sup>(2)</sup>。このような意図的な行為は、「のだ」を付加する内容が現在進行中である物語の構成部分であると判断して初めてできる行為ではないだろうか。この推測が正しいとすれば、以下の仮説が立てられまいか。

**雑談で共通基盤構築の標識として使われる「ンダケド」系は、それが付加される内容が現在進行中の物語の中でどのような位置づけなのかを話し手が把握できている場合に現れる傾向がある。**

「ンダケド」系の注釈という機能は、すでに言及した内容に対してより詳細な情報を加える必要があると判断した話し手の意図的な行為であるため、この仮説に相反しない。

併せて、「ケド」系の意味機能についても以下のように提案したい。

**雑談で共通基盤構築の標識として使われる「ケド」系は、それが付加された情報が現在進行中の物語でどのような位置づけなのかを話し手が十分に把握している状態にはない場合に使われる傾向がある。**

BTSJ-21 に現れる3つの注釈の「んだけど」を「けど」で言い換えると非常に不自然に感じられるが、このこともこの仮説で説明がつく。繰り返しになるが、注釈をつける行為は、現在進行中の物語の中でその情報（注釈）がどのような位置づけなのか把握できていないとできない行為だからである。

野田（1995: 569）は、話し手と聞き手の情報量の違いから、「社長、ちょっとひらりちゃんに折入って話があるんですけど、10分ほどいいかしら」という文では「んですけど」の代わりに「けど」を使うと不自然になると述べている。その理由として、「けど」の前に現れる内容は聞き手も当然知っている内容に限定されるからだとしているが、この理由付けは、BTSJ-20 に現れる2つの「けどー」の使用には当てはまらない。一方、上記の仮説であれば、なぜ野田の文で「んだけど」の使用が自然で、「けど」が不自然なのかも説明がつく。その理由は、「けど」の使用は、その前に現れる内容が、後件の依頼の背景情報であると話し手自身が把握していないことになってしまうからである。

## 2.2 「ンダッテ」系

「ケド」系（16例）の次に多かったのが、伝聞表現の「ンダッテ」系で、分析データ中に13例（3.3%）現れた。本系統の内訳は、13例すべて「んだって」で、その男女比は、男性が15.4%（2例）で、女性が84.6%（11例）だった。この比率だけを見ると、女性の割合が圧倒的に高いことから、女性の方が男性よりも雑談の中で第三者から聞いた情報を話し相手と共有する傾向が高いと言えそうである<sup>(3)</sup>。しかし、「ケド」系と同じように、例数の少なさを考慮に入れると一般化はできないであろう（以下、考察する他の系統でも同様のことが言えるので、男女比についての言及は本系統までとする）。

以下のBTSJ-22には「んだって」が3回現れている。

261	238-2	*	JF009	なんかね、「学科名2」のね(うん)、一年の子が(うん)、そこ行ってね、なんかね、あーのー、お店の人に言わないと買えないようなやつあんじゃん。
262	240	*	JF009	なんたらドッグみたいのとかさー><。
263	241	*	JF010	<あー、うん>>うん。
264	242	*	JF009	あーいうのを買ったんだって。😊👉
265	243	*	JF010	うん。
266	244	*	JF009	そしたらー、無言で手渡されたんだって[「無言で」を強調して]。😊👉
267	245	*	JF010	ほん[驚いた感じ]。
268	246	*	JF009	でー、「何か言えよー」と思ったらしくー(うん)、何か言うまでずーっと立って待ってたんだって。😊👉
269	247	*	JF010	うん。
270	248	*	JF009	そしたらー、なんか、ちよっとしばらくしたらー、「ありがとうございましたー」[早口でぼそっと]つって、く言っただけ><。
271	249	*	JF010	<うわーー>><。
272	250	*	JF009	すーごい態度悪いじゃん、そんなの。
273	251	*	JF009	だから、あー、それ聞いた瞬間、もう行くのやめようと思って。
274	252	*	JF010	むっかつくねー、それ。

BTSJ-22 「ンダッテ」系の例(会話番号 015)

この会話データの前では、とある駅前にあるコンビニの店員の態度が非常に悪いという話を話し手（JF009）が聞き手（JF010）にしている。そして、会話データの261行目から彼らと同じ大学に通う1年生がこのコンビニに行った時の話を話し手が始めている。その話をまとめると、次のようになる。この1年生がレジ横のホットスナックの商品を買ったときに店員から無言で商品を渡され、その態度にいい気持ちが出なかったのが、店員が何かを言うまでその場で立って待っていた。そうしたら、その店員がしばらくした後、小声で「ありがとうございました」と早口で言ったという話である。この話を聞いた時、話し手はその店に行くのをやめようと思ったと述べている（273行目）。

「んだって」が現れるのは、[ホットスナックを買った]、[無言で渡された]、[立



って待っていた]の直後である。まずここで考えたいのが、この1年生に起きた出来事を話し手が誰から聞いたかであるが、この会話データの前後の話の流れを観察しても、この話をその1年生本人から直接聞いたのか他の人から又聞きしたのか不明であった。つまり、「んだって」はこれらの区別をしない表現であると言える。

### 共通基盤構築からみる「んだって」と「って」の違い

次に日本語教育に応用するうえで、「んだって」と同様、伝聞を表す助詞「と」の口語体である「って」との意味機能の違いを明確にしておく必要がある<sup>(4)</sup>。李(2010: 9)は、「あの店のケーキ、おいしいんだって。」と「あの店のケーキ、おいしいって。」という2つの作例を比べ、これらの文中の「んだって」と「って」は置き換えることができ、ニュアンスは多少異なるが、意味の違いは明確ではないと述べている(ニュアンスの違いについて、それ以上の言及はない)。これは当然のことで、そもそも文脈を考慮に入れずに文レベルで行う比較をいくらしたところで、こうした意味機能の違いを見出すことは難しい。両者の形式上の違いは「のだ」の有無であり、この「のだ」には話し手が聞き手に認識の共有を求める働きがある(安田2012)ということを見ると、文レベルでの比較考察ではなく、談話レベル、つまり、聞き手とのどのような発話のやり取りの中でその発話が現れたのかという点を考察しなければ、違いを知ることはできないであろう。

安田(2012)は、認識の共有を求めるという意味機能を持つ「のだ」はそれが現れる文脈によって「既に決まっている事柄である」(p. 197)、「反対意見を受け付けない、または反対せずに受け入れる」(p. 197)、「話し手自身の判断として表現しない」(p. 198)などのような表現効果を発話に与えると述べている。言い方を変えれば、聞き手の考えや判断を聞く意図がない内容に話し手は「のだ」を付加するということである。このような効果を持つ「のだ」が「ンダケド」系や「ノ」系など、次に話す内容の前提づくりの際に頻繁に表れている(西郷・清水2022)ことも合点がいく。それは物語の途中で聞き手に話の腰を折られない(発話権を取られない)ようにするためである。

以上のような表現効果を持つ「のだ」の有無から「んだって」と「って」の意味機能の違いに関して、以下の仮説を立てることはできないだろうか。

雑談の中で、話し手が入手した伝聞情報を次に話す内容の前提として扱う場合、「って」ではなく、「んだって」を用いる傾向がある。

聞き手に認識の共有を求める「のだ」を含まない「って」の使用は、伝聞内容を「認識」に留めるのではなく、聞き手からその内容に対する考えを引き出したり、適切な行動を促したりすることになるため、物語を展開するための前提づくりには適していないと言えよう。BTSJ-22 に現れている3つの「んだって」を「って」に入れ替えて少し前から話の流れを追ってみると、伝聞情報で物語を展開していくという話し手の意図が聞き手に明確に伝わらず、ぶつ切れのような表現効果を与えてしまう（その結果、聞き手に割り込まれる可能性が出てくる）のではないだろうか。

### 2.3 「ワケ」系

「ンダッテ」系（13 例: 3.3%）の次に多かったのが、「ワケ」系で、分析データ中に 6 例（1.5%）観察された。その内訳は、「わけよ」が 3 例（すべて女性）で、「わけよー」（女性）、「わけ」（男性）、「わけね」（男性）が各 1 例であった。なお、西郷・清水（2022）では「ノ」系の考察の際、「ね」や「よ」との組み合わせがどのように話の流れに影響するかという点を詳しく考察したが、「ワケ」系は一般化するには例数が非常に限られているため、この点にまでは踏み込まない。

以下の BTSJ-23 は「ワケ」系の 1 例である。

373	353	*	JF011	<ホスト役だった>> )じゃん。
374	354	*	JF012	うんうんうん。😊👉
375	355	*	JF011	だから、ゲストとして行くの、すごい楽しみにしてたわけよ。
376	356	*	JF012	<ね>< 。
377	357-1	/	JF011	<い>> )きなり行って、お金だけ払って、もう(うん)パーティー始まっちゃって、“あ、今日は何やるんだろう”って、“今日は何を”>< ,,
378	358	*	JF012	<“あ、せんばーい”>> )とか言って。
379	357-2	*	JF011	何が始まるんだろうっていうのが、<笑い>面白かったよね。

BTSJ-23 「ワケ」系の例(会話番号 016)

この会話データの前では、夏パ（夏休みパーティー）について話されており、以前は話し手（JF011）と聞き手（JF012）が主催する側だったが、今年は呼ばれる側として参加したときの話をしている。そして、373 行目と 375 行目で、話し手が「今まではホスト役だったので、今回はゲストとしていくのを大変楽しみにしていた」

という内容の発話をし、それに「わけよ」を付加している。376行目で、この発話に対する聞き手の同調（「ね。」）が現れている。その後、377行目と379行目で、話し手がどのように楽しみにしていたかという内容で話を展開させている<sup>(5)</sup>。

### 共通基盤構築からみる「わけだ」と「のだ」の違い

この「わけよ」の「わけ」は「わけだ」の「だ」が省略されたものだと考えられる。益岡（1991）が「わけだ」と「のだ」を共に同じ説明のモダリティに分類しているように、これらの意味機能は似ていると考えてよいだろう。松岡（1987: 4）も「両者の使い分けは、話し手の微妙な心理に左右されるもので、相互に入れ換えてもそれほど不自然にならないケースが多い」と述べている。実際に、BTSJ-23に現れる「わけよ」も「のよ」と言い換えてもそれほど不自然さを感じない。

しかしながら、ただ単に「認識の共有」（安田 2012）を求める「の」とは違い、「わけ」にはそれが付加された発話とその前に語られた内容との間に「その2つを結びつけるに十分な筋道があるということ」を主張する話者の態度を表す」（横田 2001: 60）という基本的な意味機能がある。そのため、「わけ」と入れ替えた場合、不自然になる「の」もある。以下のBTSJ-24を見てほしい。

564	531	*	JF009	その分、売店がすごい充実してて。
565	532	*	JF010	あー。
566	533	*	JF009	うん。
567	534	*	JF009	寮の中に売店ができてね(うん)、駄菓子屋さんみたいな感じで。
568	535	*	JF010	あー、楽しいねー。
569	536	*	JF009	そう。
570	537	*	JF009	でねー、するめいかを買うのが好きだった🍡🍡🍡
571	538	*	JF010	あー。
572	539	*	JF009	おいしんだ。
573	540	*	JF010	いいな。
574	541	*	JF009	ちよつとね、びり辛でおいしい🍡🍡🍡
575	542	*	JF010	うん、うんうんうん。
576	543	*	JF009	足がね、5本ついてて、〈2人で笑い〉、ちゃんと5本、こうびえーってなってるー(うん、はん)、半分切ってるんだよね、これ。
577	544	*	JF009	開いて半分にしてるんだよね、とか言ってる笑いながら。
578	545	*	JF010	〈笑い〉〈はー〉{<}

#### BTSJ-24 「ワケ」系と入れ替えると不自然な「ノ」系の例(会話番号 015)

この会話データの前では、話し手（JF009）が中学時代に住んでいた学生寮の食事がよくなかったと語っている。そして、564行目と567行目で、話し手はその寮の売店が駄菓子屋さんのように非常に商品が充実していたと述べている。

この会話データには、570行目と574行目にそれぞれ「の」が1つずつ現れてい

るが、この2つの「の」を「わけ」に入れ替えて、日本語としてそれぞれ自然かどうかを考えてみよう。まず、570行目の「の」を「わけ」に入れ替えて、「でね、するめいかを買うのが好きだったわけ。」はどうだろうか。文脈を考慮に入れず、文レベルで考えると、特段不自然には思えない。しかし、直前の「寮の売店が駄菓子屋みたいで充実していた」という内容を前提とすると、「するめいかを買うのが好きだった」と「わけ」の組み合わせには不自然さを感じられるであろう。一方、2つ目の「の」が現れている「ちょっとね、ぴり辛でおいしいの。」の「の」を「わけ」に入れ替えても、1つ目の「わけ」に感じたような不自然さはほとんど感じられないのではないだろうか。この発話の前に話し手は「(売店で買っていたスルメイカが) おいしかった」と述べている。これら2つの例に対して感じる自然さの違いの原因は、「わけ」が付加された発話とその前に語られた内容の間に「十分な道筋」(横田 2001: 60)があるかどうかの差であると考えられる。1つ目の「寮の売店が駄菓子屋みたいで充実していた」と「スルメイカを買うのが好きだった」の間には十分な道筋、言い換えれば、論理的な結びつきを見出すことは難しいが、2つ目の「(売店で買っていたスルメイカが) おいしかった」と「ぴり辛でおいしい」の関係は、後者でどのように美味しかったのかを説明している点で十分な道筋があると言える。今回の分析で得られたその他の「わけ」5例全ても「わけ」が付加された内容がその前に語られた内容の結果と考えられるものであり、十分な道筋があるものであった。

以上の考察から、「わけ」の用法に関して、以下のように仮説を立てたい。

雑談で「ワケ」系が共通基盤構築の標識として用いられる場合、それが付加された内容と、その前に語られた内容との間に何らかの論理的な結びつきがある傾向にある。

日本語学習者がこのような意味機能を持つ「ワケ」系が使えれば、雑談での物語の語りにおいて「ノ」系の過剰な使用を避けることができるのではないかと考える。

## 2.4 「ヨ」系

今回の分析データの中で、「ヨ」系は全部で3例(0.8%)現れ、その内訳は2例

が「よ」、1例が「よー」であった。

BTSJ-25 でその 1 例を紹介する。

51	49	*	JF010	ふおーとかいってみんなさ、言ったらさー、そうなんか、手術のときの話さー(＜笑い＞)、してくれたんだけど、めっちゃ面白かったよー。😊👄
52	50	*	JF010	なんかね、途中で麻酔がきれたんだって。
53	51	*	JF009	えー[驚いたように]。
54	52	*	JF010	でー、それさー、それ痛いじゃん(笑いながら)。
55	53	*	JF009	=痛いよね(笑いながら)。
56	54	*	JF010	＜笑い＞“おれは死にかけたよ”とか言っ(笑いながら)＜(笑い)＞。

### BTSJ-25 「ヨ」系の例(会話番号 015)

この会話データの前で、入院していたある教員がリレー形式で行われたコースの最後の講義にいきなり担当教員として現れたという話を話し手(JF010)がしている。51行目で、話し手は、[(その時、その教員が語った)手術を受けたときの体験談が面白かった]ことを述べ、その内容に「よー」を付加している。そして、52行目以降、話し手はその教員の体験談の内容を語ることで話を展開している。この流れから、ここでは「よー」が共通基盤構築の標識として機能していると言える。言い換えれば、今から展開していくその面白かった体験談の内容に注目してほしいというのろしとして機能しているのである。

### 共通基盤構築からみる「よ」と「のよ」の違い

では、共通基盤構築の標識としての「よ」と「のよ」違いはどこにあるのだろうか。西郷・清水(2022)では「のよ」が共通基盤構築の際に「話し手が物語の中でより注目してほしい部分をハイライト化する際に使われる」(p. 68)と指摘しているが、上述の「よ」の機能も一見同じように見える。これについては、西郷・清水で分析・考察された「のよ」の例と上記 BTSJ-25 の 51 行目の「よ」の違いを基に以下のように仮説を立てたい。

雑談で共通基盤構築の標識として機能する場合、「のよ」は話し手が物語をさらに展開させる物語の構成部分に付加されるのに対して、「よ」は物語自体に対する話し手の評価に付加される傾向がある。

より簡潔にまとめれば、共通基盤構築の標識としての「のよ」は物語の中で、「よ」

は物語の外で用いられると言える。2.2 節で既に述べたように、「のだ」には「話し手自身の判断として表現しない」（安田 2012: 198）という表現効果がある。そう考えると、物語自体は話し手自身の主観ではなく、客観的事実であるため「のだ」の使用が必要になる。一方、「めっちゃ面白かったよー」（BTSJ-25: 51 行目）などの話し手の評価は主観性を持つため、「のだ」を使用する必要性がないと考えることは合理的であろう。

今回の分析で得られた「よ」の他の 2 例も話し手の評価に付加され（「え、ごめんじゃないよ。」[会話番号 013: 277 行目]、「なんかすごいよ。」[会話番号 207: 78 行目]）、その後に評価の説明が続いているため、この仮説を支持する材料になるものだと考えられる。

## 2.5 「カナ」系

分析データ中、「カナ」系は「かな」が 1 例現れた。以下はこの 1 例が観察された会話データである。

179	158	*	JM013	メル友、メル友とか探してたもん。
180	159	*	JM013	一時期、おれ。
181	160	*	JM014	うん？
182	161	*	JM013	メル友いたよ。
183	162	*	JM014	へー<軽い笑い>。
184	163	*	JM013	自殺しちゃった。
185	164	*	JM014	う、まじ？[かなり驚いたように]。
186	165	*	JM013	まじで。
187	166	*	JM014	うっそ。☺️👉
188	167	*	JM013	=メル友んなってー、中2か高1ぐらいかな??(うん)、メル友んなってー、それでー全く顔知らないんだけど(あん)、段々仲良くなって、電話番号までお互い、携帯の番号(うん)とか教えあって、電話で話してたの(うん)お互い(うん)、結構しょっちゅう。
189	168	*	JM013	“あー、いい子だな”って、「地名1」の子なんだけど。

BTSJ-26 「カナ」系の例(会話番号 007)

この会話データの前では、インターネット上のチャットと BBS（電子掲示板）の違いについて、話し手（JM013）が聞き手（JM014）に説明をしている。そして、会話データの 179 行目から 184 行目で、話し手が以前チャットを通じて作ったメル友（電子メールでやり取りをする友達）が自殺したことを告げる。185 行目と 187 行目で、その事実に対する聞き手の驚きが現れ、188 行目以降、話し手はそのメル友について話をしている。188 行目では「て」（「メル友んなってー」「だんだん仲良くなって」「携帯の番号とか教えあって」）、「んだけど」（「全く顔知らないんだけど」）、「の」（「電話で話してたの」）という共通基盤構築の標識を用いて物語を展開して

いる。

そのうち、「メル友になってー」は全く同じものが2回繰り返されているが、その2つに挟まれる形で「中2か高1ぐらい」に、「かな??」が付加されたものが現れている。つまり、1回目の「メル友になってー」の後に、メル友ができた時期を表す「中2か高1ぐらい」が現れているわけである。この流れから、「中2か高1ぐらい」が「メル友になってー」の補足情報として機能していると考えられよう。そして、この補足情報に記憶が曖昧なこと（平山 2015）を表す「かな」を付加することで、話し手はメル友ができた時期を明確には覚えていない自身の認知状態を話し手と共有している。このような「かな」の用法は以下のように解説することができる。

話し手が聞き手に物語を語っている最中に、補足したほうがよいと判断した情報の記憶が曖昧な場合、「カナ」系を用いてその情報を共通基盤化する。

聞き手との間で共通基盤として扱いたい情報を話し手がいつも明確に記憶しているわけではない。別の言い方をすれば、物語を展開させていく上で記憶が曖昧な情報を共通基盤化する必要性が出てくることもあるだろう。そのため、「かな」を共通基盤構築のプロセスでも使えることを学習者が知っておくことは大切だと言える。

## 2.6 結論先出しストラテジー

分析データの中に以下のような会話の流れがあった。

605	574	*	JF011	彼女はだいぶ、使い、づらいて言ってたけどねー、暗室。
606	575	*	JF012	あ、ほんと。
607	576	*	JF011	うん。
608	577	*	JF011	ちょっとー、気まずかった、なんか。😊👉
609	578	*	JF012	なん、なんで。
610	579-1	/	JF011	なんかか?<[<],
611	580	*	JF012	<なん>[>]で。
612	581-1	/	JF012	何であんな、“何も写真のこと分かってないような人が建てたみたい暗室になっちゃってんの?”とか言われて、
613	581-2	*	JF012	え、<そうなの?>[<]。
614	579-2	*	JF011	<一応、私とか>[>]「人名1」が、見て(うん)関わったのにー(うん)<笑い>。

BTSJ-27 結論先出しストラテジー(会話番号 016)

この会話データの前では、聞き手 (JF012) が話し手 (JF011) に「写真部どうよ?」

と聞き、話し手は「超楽しい。」と答えている。その後、話し手は一人の部員の名前を挙げ、聞き手にその人（以下、Aさん）を知っているかどうか尋ねる（話の流れから、聞き手も写真部の部員だがあまり部活に参加していない様子）。その質問に対し、聞き手もAさんを知っていると答え、Aさんの年齢について二人で話している。そして、会話データの605行目で、話し手はAさんが写真部の暗室が使いづらいと言っていたことを話し手に告げる。606行目に聞き手の理解の表明（「あ、ほんと。」）が現れた後、608行目で話し手は「ちょっと一、気まずかった、なんか。」と聞き手に伝える。この「気まずかった」の対象は、605行目で明かされたAさんの発言ではなく、この後に続く内容だと考えるのが話の流れから自然であろう。609行目の「なん、なんで。」から、聞き手も同じように理解していることが窺える。612行目は、会話データによると、聞き手（JF012）の発話になっているが、前後の話の流れから判断すると、これは明らかにデータの誤処理だと考えられ、話し手（JF011）にすべきであろう<sup>6)</sup>。612行目以降、話し手の「気まずかった」理由で物語が展開されていく。まず同行では、暗室の設置方法にAさんが不満を漏らしたことが語られている。つまり、608行目の発言は、612行目から始まる物語の前振りの役割を果たしていると考えられる。このように先に結論（上記の会話データでは「気まずかった」）を提示して、その後、結論に至った物語で話を展開させていく流れを、本研究では「結論先出し」戦略と呼ぶこととする。

この戦略に類似した会話の流れは、2.4節で考察したBTSJ-25にも見られる。BTSJ-25では、まず評価を述べて、その評価に「よ」を付加し、その後、評価の対象となった物語で会話を展開していくというものであった。本研究では、「ヨ」系には「評価」、本戦略には「結論」という異なる用語を便宜上用いているが、両者の違いは発話内容をハイライト化し、聞き手からの注目を求める「ヨ」の有無に過ぎず、これらは同様の戦略として統合できる可能性もある。これは、「めっちゃ面白かったよー」（BTSJ-25: 51行目）の「よー」がなくても、また「気まずかった」（BTSJ-27: 608行目）に「よ」を付加しても前後の話の流れに全く不自然さを感じないからである。ただし、この点について何か具体的な結論を導くには分析データ中の例数が限られているため、本稿ではこれ以上の議論は行わない。



## 7. おわりに

本稿では、西郷・清水（2022）に続いて、雑談における共通基盤構築のプロセスを詳細に分析し、その中で現れる言語形式やストラテジーを明らかにした。本稿で考察をしたものは、共通基盤の内容を[話し手のみが知っている場合]に現れる「ケド」系、「ンダッテ」系、「ヨ」系、「カナ」系、結論先出しストラテジーである。西郷・清水で考察した「ンダッテ」系および「ノ」系とは異なり、分析データで観察されたこれらの系統・ストラテジーは例数が少なく一般化を主張するには至らなかったが、共通基盤構築という観点からそれぞれの異なる働きをあぶり出し、日本語教育への応用への道筋は示せたのではないかと考える。

なお、共通基盤の内容を[話し手と聞き手が共に知っている場合]と「聞き手のみが知っている場合」に現れる言語形式・ストラテジーは続編で報告する予定である。

## 注

- (1) 本稿は西郷・清水（2022）の続編であるため、図の番号は同稿からの通し番号を用いることとする。
- (2) この「認識の共有」を、学習者への説明を念頭に簡潔に言えば、今村（2007）が提案しているように、「のだ」の前に現れる内容を一つのまとまりとして見つめ、そのまとまりを聞き手に差し出すという説明になるのかもしれない。
- (3) 女性の「んだって」の使用（11例）は5つの異なる会話にまたがって現れていた。その中で、最も多く表れていたのが会話番号015の7例（4例がJF010で、3例がJF009）であった。
- (4) 一般的に「って」は初級レベルで、「んだって」は中級レベルで扱われる文法項目である。
- (5) 会話に現れる「わけ」に言及している先行研究が非常に少ない中で、横田（2001）は話し言葉でよく現れる「わけ」の例として「昨日ね、彼のうちに初めて行ったわけ。」(p. 49)を挙げている。これは作例で文脈がないため、想像の域を出ないが、BTSJ-23に現れる「わけ」と同じように、次に話を展開させている前提づくりの標識として機能していると考えるのが自然だと思われる。
- (6) 611行目の発話もデータの誤処理でJF011の発話の可能性がある。

## 参考文献

今村和宏（2007）『『のだ』の発話態度の本質を探る：『語りかけ度』と『語りかけ

- タイプ』『一橋大学留学生センター紀要』 第 10 号 pp. 37-48 一橋大学留学生センター
- 西郷英樹・清水崇文 (2022) 「雑談で話し手はどのように聞き手との間に共通基盤を構築しているか (1)」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』 第 32 号 pp. 43-72 関西外国語大学留学生別科
- 野田春美 (1995) 「ガとノダガー前置きの表現ー」 宮島達夫・仁田義雄(編)『日本語類義表現の文法(下) 複文・連文編』 pp. 565-572 くろしお出版
- 平山紫帆 (2015) 「自然会話における終助詞『かな』の用法」『日本語教育実践研究』 第 2 号 pp. 68-79 立教日本語教育実践学会
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティーの文法』 くろしお出版
- 松岡弘 (1987) 「『のだ』の文・『わけだ』の文に関する一考察」『言語文化』 第 24 号 pp. 3-19 一橋大学語学研究室
- 安田崇裕 (2012) 「従属節におけるノダの機能」『研究論集』 第 12 巻 pp. 189-207 北海道大学大学院文学研究科
- 横田淳子 (2001) 「文末表現『わけだ』の意味と用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』 第 27 号 pp. 49-64 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 李光輝 (2010) 「文末の『って』『んだって』と対応する韓国語についてー元話者(情報源)が第三者の場合を中心にー」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要(外国語編)』 第 1 巻 第 1 号 pp. 1-20 近畿大学教養・外国語教育センター
- 李徳泳・吉田章子 (2002) 「会話における『んだ+けど』についての一考察」『世界の日本語教育』 第 12 号 pp. 223-237 国際交流基金

## 使用コーパス

宇佐美まゆみ監修 (2020) 『BTSJ 日本語自然会話コーパス (トランスクリプト・音声) 2020 年版』、国立国語研究所、機関拠点型基幹研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」、サブ・プロジェクト「日本語学習者の日本語使用の解明」(リーダー: 宇佐美まゆみ)

## 謝辞

本研究は JSPS 科学研究費補助金・基盤研究(C)・JP20K00714 「雑談での聞き手との共通基盤構築に関わる表現・ストラテジーに関する調査とその応用」の成果の一部である。

(hsaigo@kansai-gaidai.ac.jp)

(takafu-s@sophia.ac.jp)